

【人権協だより】 12月4日～10日は人権週間です

問合せ先 貝塚市人権啓発推進委員協議会事務局(人権政策課内) ☎433-7160

考えよう 相手の気持ち 育てよう 思いやりの心

貝塚市人権啓発推進委員協議会は、市民一人ひとりの人権意識の確立と高揚を図ることを目的に、昭和54年に設立されました。

現在は、各町会や自治会から選出された委員などが中心となり、5月には「憲法週間市民のつどい」、12月には「人権を守る市民のつどい」の開催や、「じんけんセミナー」の研修会や広報活動などを通じて、人権尊重のまちづくりを進める啓発活動を行っています。



【人権を守る市民のつどい】

「がんばらない」けど「あきらめない」～命を支えるということ～

医師 鎌田寛さん

昨年12月、コスモシアターに医師で作家の鎌田寛さんを迎え、講演会を行いました。39年間医師として地域医療に携わり、チェルノブイリ、イラク、東日本大震災の被災地支援に取り組む鎌田さんの講演の一部をご紹介します。



「ちょっと違う」ことにはものすごい可能性がある



映画界でヒット作品を世に送り出しているスピルバーグという監督は、字が読めないという発達障害であることをカミングアウトしています。必死で教えても字が読めない場合、「この子はだめ」というレッテルを貼ってしまうことがありますが、そうするとスピルバーグのような人は出てきません。

「ちょっと違う」ということはものすごい可能性を秘めているということです。ちょっと違うことを許せなくなった社会で、僕たちは生きづらくなっています。自由がなくなると、新しい発見や発明もなくなってきます。

そもそも日本人はちょっと違う「おかしい」人たちです。この地球上に命が始まったのが38億年前、そして700万年前にアフリカのサバンナで僕たちの祖先が生まれました。弱い僕たちは、強いライオンに食べられないようにコミュニケーションを作り、生き抜くために脳も大きくしていきました。そして別の違うところに行けば、もっと面白いものがあるのでは…という好奇心でアフリカを出ます。何万年もかけて移動していきませんが、ほどほどの中央アジアあたりでとどまらず、はるばる日本まで来たのはよほどおかしい人たちだと思います。

でもこの「おかしい」ことが大事です。おかしいことを認め合えたから、こんな小さな島国が経済大国になっていきました。「おかしい」ということには、すごい可能性があります。しかし、今の社会は、みんなまわりの空気を読んで顔色をうかがっているように思います。みんなおかしい人たちなのに、ちょっと変わっている人がうんと変わっている人を「あいつはおかしい」とレッテルを貼っています。わずかな違いを差別しているのです。可能性のある人がイキイキ暮らせるよう、みんなが応援してあげる国になればと思います。

相手の身になると自分も幸せになる

ヒトのホルモンの中にはセロトニンというものがあって、これは自分を幸せにするホルモンと言えます。感動・喜びのホルモンで、うつ病やパニック障害などを予防します。

それに対し、他人を幸せにしようとするホルモンと言われているのが、オキシトシンです。赤ちゃんへの授乳時にお母さんの脳内に出て、痛みの緩和や生きる力になります。出産の大変さを乗り越えられるのは、このオキシトシンのおかげではないかと思えます。

肌と肌が触れ合うとこのホルモンは出やすいと言われています。そのためか、被災地において、ペットを飼っている人は強かったです。

ペットを撫でているだけでもオキシトシンは出ますから。地域で一所懸命活動している人が元気そうに見えるのも、オキシトシンのためではないでしょうか。相手の身になるとこのオキシトシンが出て、結局自分を守ってくれます。

敵国の子どもを助けたい

もう65年争っているイスラエルとパレスチナですが、ある時パレスチナの12歳の男の子が、イスラエル兵から頭に銃撃を受けました。男の子の父親は、息子を助けようと医療が進んだイスラエルの病院に連れて行きましたが、もう助けることはできないと言われました。でも心臓は動いていました。

敵国であるイスラエルの12歳の女の子が心臓症で心臓移植を望んでいました。息子の父親は、息子の心臓をこの女の子に移植することを選びました。息子の父親は女の子を抱きしめて「まるで息子が生きているみたいだ、うれしい」と言いました。この父親に「よく承諾しましたね」と言うと、父親は「海でおぼれている人に、『国籍は?』『民族は?』『宗教は?』なんて聞かないでしょ? 私はただ、人間として正しいことをしただけです」と答えました。

移植を受けた女の子は今、看護学校に行っています。夢は何かと聞くと、「私はパレスチナの人に助けられたので、今度はパレスチナ難民キャンプの恵まれない子どもを助けたいです」女の子が看護師になって敵のけが人を助けたら、互いの憎しみは消えるかもしれません。

私は死んでも友だちは助かるからうれしい

イラクの女の子サブリーンは、11歳の時に目のがんになりました。手術をしましたが、がんは反対の目にも広がり骨にも転移して、4年間の闘病の末15歳で亡くなりました。

亡くなる時、サブリーンはこう言いました。「鎌田先生に伝えてください。私は死にます。でも私は幸せでした。私はがんになって学校の先生に勉強を教えてもらいました。勉強がどんなに素敵なお仕事かわかりました。私は絵をかくことが大好きでした。私の絵はほめられて、日本に運ばれ、チョコレートの缶にプリントされました。そのチョコを優しい日本人が買ってくれて、その利益でイラクに薬が届けられていく。私は死ぬけどイラクの子どもが救われるから、私はうれしいです」

自分は死んでも友だちは助かるからうれしいというサブリーンも、相手の身になって考えていたのです。



人間は不思議な動物です。みんな自分のために生きていますが、ほんのちょっと、1%誰かのために生きだすと、生きるのが楽になっていきます。

人権というのはその1%、相手の身になるという事です。「こんなことを言われたり、いじめにあつたらどれほど辛いかな…」みんなが少しだけ相手の身になれば、差別はなくなっていきます。